

仏女新聞

仏女新聞社 飯島可琳

お待ちせしました！仏女新聞二月号です。一月号は休刊になってしまい、すみませんでした。二月は冬のピークですから、とても寒いですね。そんな寒い中でも熱くなれる仏像が展覧会に出張しています。

高野山の名宝展特集



…八大童子…

あべのハルカス美術館
1月23日～3月8日

八大童子の中で運慶がつくった童子は六体だ。運慶のつくった八大童子は、仁王のように眉間にしわをよせていたり、悔しそうには見えないのに唇を噛んでいたりと表情が豊かだ。童子全員が厳しい顔をしているように見えても、それぞれの童子で「厳しさ」の表れ方が違う。厳しい顔なら

こう言う感じで、優しい表現ならこう言う感じで、と決めてしまうのではなくて、同じ「厳しさ」というテーマでもさまざま表現方法を思いついて、使い分けられることができるのが運慶のすごみなかもしれない。

愛らしさはどこから？

運慶の八大童子は、その名の通り「童子」のような愛らしさも持っている。今回はその愛らしさがどこから感じ取れるのかを考えたいと思う。

まず、愛らしさが一番わかりやすく表れていると考えられるのは顔つきや体つきなどの印象だ。八大童子と同じように厳しい顔をしている仁王は体全体に筋肉をまとっているが、八大童子は全体的にふつくと丸みをもっている。

ふつくと丸みとしているといえば、菩薩や如来もそうだ。しかし、菩薩や如来と八大童子は明らかに違う点がある。菩薩や如来は感情をむきだしにせず、静かな表情で伝えている感じがある。しかし、八大童子は違う。眉間にしわを寄せたり、ポーズをとったり、体全体を使って何かを伝えようとしている。そんなところにも愛らしさが感じられるのかもしれない。

おすすめポイント

八大童子のつけている飾りはとてもかわ

いい。金属製のきらきらとした飾りではなく、布地を使った光らない飾りで、さりげなく足首や腕や手首をくくっている。首に巻き付けた衣をリボン結びにしているところなどもユニークだ。

また、八大童子は細部の表現に筆が用いられている。像の造形の一部としてできあがった髪の毛に加えて、生え際の髪の毛の乱れを筆を使って作り上げたり、目頭から目尻を筆でなぞり鋭い目つきにしたり、細かすぎると言つていいほど工夫されている。私たちがその工夫に気づけば気づくほど、八大童子をつくった運慶の苦労は報われていくのではないかと。

…孔雀明王…



孔雀明王は高野山の仏像の中で私が一番好きな仏像だ。しかし、高野山の名宝展に行くまで模刻や写真でしか見たことがなかった。ただ「孔雀に乗っていること」ととても物珍しく感じていた。

今回の展覧会で孔雀明王を見ると、想

像していた以上にきれいなお像だった。写真で見るとよりもずっと孔雀明王の顔はシャープな感じだったし、孔雀明王の目はまっすぐ前を見つめていて、迷いが感じなかった。孔雀の羽は、開いていた羽を閉じていく様子ではなくて、羽を開いていく様子に見える。二人のポジティブな印象はよく似ている。孔雀明王と孔雀の仲の良さも伝わってくるようだ。

孔雀の羽は表裏びっしりと描かれている。さらにその一つ一つの羽にいていねいな模様がかけられているのだから、息をのむような細かさだといつていいだろう。その作業は決して軽い気持ちではできないものではない。孔雀明王をつくった快慶は根気強い人だったに違いない。

冬のおすすめ

京都では京都市観光協会のイベントで「京の冬の旅」が三月十八日まで行われています。非公開の文化財を見ることが出来るチャンスなので、ぜひ見に行ってみて下さい。私のおすすめは仁和寺の経蔵です。中には「輪蔵」というまわるお経入れがあり、見ているだけでも楽しくなります。詳しいことは「京の冬の旅」で検索してみてください。